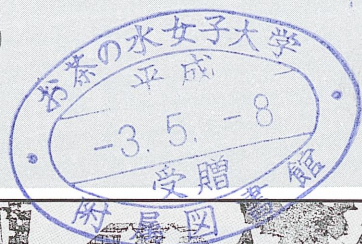


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1991

6



第90巻 第6号 日本幼稚園協会



# 保育内容 実践と研修シリーズ



新しい幼稚園教育要領を実践するにはどうしたらいいか。単なる語句の解釈や解説にとどまらず、教育要領の基本を踏まえた実践例やエピソードを多く例として示しながら、これからの保育の実践の方向を示すシリーズです。保育者養成校の学生はもちろん、現場の先生方にも実践や研修のための懇切な手引き書となります。

## こころとからだの育ち

—健康—

近藤充夫／落合 優・編著

B5判 208頁 定価1,800円

子どもが園で安定して活動できる条件と援助の方法をたくさん例で示します。

## 保育のなかのかかわり

—人間関係—

森上史朗・編著

B5判 208頁 定価1,800円

今と未来を生きるための人とのかかわりをどう考えどう援助していくか、そのポイントを示します。

## 自然や社会とのかかわり

—環境—

中沢和子／藤田復生 他・著

B5判 208頁 定価1,800円

園環境の考え方と設定、子どもと自然や社会とのかかわりのあり方をたくさん例を通して示します。

## ことばからの育ち

—言葉—

村石昭三・編著

B5判 208頁 定価1,800円

豊かな感性とイメージを培い、自分の言葉を育てる言葉指導のあり方を具体的に示します。

## 豊かな"表し"に向けて

—表現—

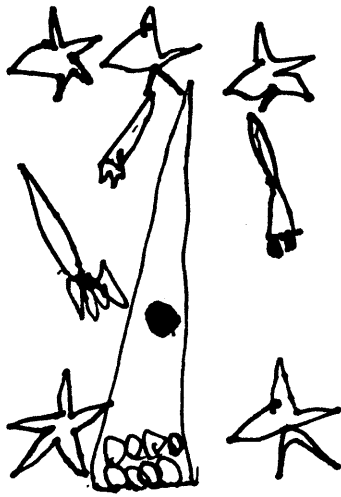
黒川建一・編著

B5判 208頁 定価1,800円

新しい幼児の「表現」とは何か。たくさん例を通して総合的な見方と指導を位置づけています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

# 幼 児 の 教 育



第90卷 第6号

# 幼児の教育 目次

## ——第九十巻 第六号——

© 1991  
日本幼稚園協会

△巻頭言▽ 保育の中の「環境」ということ……………清水 光子…(4)

手放すことについて——成長の後再度考える……………津守 真…(7)

### 特集△腐る▽

「腐る」ということのプラス面……………相田 浩…(14)

くされ縁……………平田 道子…(17)

堆肥が作る自然菜園……………徳野 雅仁…(21)

ぎんなんとモルモット……………島村 和子…(26)

附属幼稚園の教育(3)……………村石 京…(30)

チェコ便り(8) J・A・コメント

T・G・マサリクの講演から(1)……………大梶 優子…(34)





園庭より(12) 電話……………松井 とし…(40)

故国を後にして(2)

良き歌のために……………モーレンキャンプふゆこ…(42)

ある日の育児日記から(6)……………佐藤 和代…(46)

絵本の世界(3)

『ぐりとぐら』をめぐって……………高原 典子…(47)

若いお母さんたちへ

たんぼぼの会……………渡部みさ子…(56)

表紙版画・樫村 文夫

扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

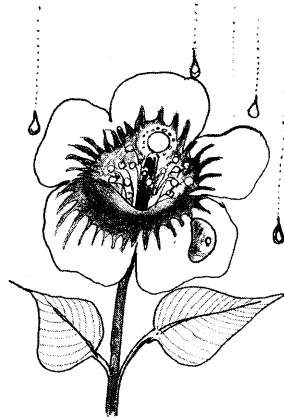
編集委員・本田 和子／豊田 一秀・吉岡 晶子

編集部・大沢 啓子



# 保育の中の「環境」ということ

清水 光子



「草笛や子が留守の家吹き歩く——加藤知世子——僅か数年前どこにもこのような情景はあった。」「毎年今頃になると、東京丸の内にあるビルの人工池からかかるがもの親子が皇居のお濠へ引越しのニュースがある。」「ここはもと武蔵野の雑木林で、子ども達とどんぐりを拾った丘。が、芝以外の草一本もないように整備されたゴルフ場のグリーンになった。」「十年程前には獣道もがけ側にあったハイウェー。時速百軒近いスピードで、『自然を満喫しよう』と国立公園をめざす車の列。」「広い砂丘がつづいて、矮小な松の防砂林が汐風をあびていた鄙びた海岸に、白い十階建てのリゾートマンションがあつという間に建った。」「……」「この辺、年々変わりますねえ。」という挨拶さえまれになったあちこち。」「自然を大切に、自然を○○〇〇」というキャンペーンの裏側で。



生活環境が変わることは歴史を繙くまでもなく当然のことで、昔から人間誰しもより豊かな快適な生活を求めてきている。情報化社会と言われるが情報伝達の方法など、目も耳もくらむような有様である。科学技術の進歩発達のおかげ、様でと喜んでばかりでないことは今、みな気付いていると思う。気付かない筈はないと思う！ 物事、プラスがあればマイナスがあるから。

### E C O C I D E 意図的環境破壊をしているのである。

人間は、というより生命いのちあるものは環境に育てられる。環境の影響が生物の育ちには大きくかわることは今更いうまでもない。これから育とうとする幼い生命は殊にその影響を強くうける。よくも、悪くも、である。何もかもが便利、簡単になった日常生活の裏で、子ども達の思考力、創造力、筋力などが低下してきていると言われる。大人の作った環境の変化がなせるわざ！「よかれと思ってしたことなのに……」という古い悔悟のことばが思い出される。人間という生態系の頂点にある（と自負している？）者が自らやりつづけているとは、どういうことだろう。何と矛盾だらけな！

水上勉・灰谷健次郎両作家の往復書簡を読んで沢山の教えと感動を得た。「自然との調和本気でそれを考えたなら人間の生活は相当厳しくなる」「生命に対するこまやかな感情、心ない大人たちによって、或いはまた優しさの通らない社会によって踏みじられ、傷ついている子ども達や若者たちがあまりに多い」「生命への畏敬のないところに教育はない」等々。

新しい幼稚園教育要領の「環境」という領域は前要領の領域「自然」が中心ときく。「自然や社会の事象など云々。環境に積極的にいかかわる力を育て、生活にとり入れ云々」とある。そしてどうそれを実際に保育の場に生かすかは保育者にゆだねられているという。ああ、ああと声にならないもどかしさ。

梅雨空の或る日、郊外の友達の家を、始めてで尋ねめぐねて歩いていたとき、低い生垣の角を曲がった、さほど大きくない平屋建てから、何とも言えない響み<sup>ま</sup>がきこえ、私を襲った。打たれたように立ち止まった。何のことはない、子ども達が嬉々<sup>ま</sup>として遊んでいたのだった。後で友達にきくとお母様がもう数十年前から園長で、今は息子さん夫婦と数人の若い方が保育しておられる〇〇幼稚園だとのこと。いろいろな木や草が、雑草とよばれる草も、いつも一ぱいあって、庭の中を子ども達が駆けまわって遊んでいる、という。

ロバート・フルガムの『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』の幼稚園。「環境がどうあるうと人間性の本質は容易には変わらない」というアガサ・クリステイがミス・マーブルに言わせていることば。そんなことを思い思い、何はともあれ子ども達一人ひとりが一とき一ときを充実して生きる「生活を、生活で、生活へ」との場とききを、パンドラの箱の残り最後を念じたのである。

(音羽幼稚園)



# 手放すことについて

## ——成長の後再度考える

津守 真

普通高校の二年生になったGくんが久しぶりに私共の学校に来た。ひとりで行くつもの電車を乗りついできたGくんは、最初庭の入口の門があかなくて、建物をぐるりと回ってかなり見つけにくい玄関のベルを押してあらわれた。私よりも背が高くハンサムな青年になったGくんは、親しげに私に近寄り、正月には郵便局でアルバイトをしてお金をもらったと言う。知っている先生がいるかなと言っ

てホールから庭に出ていった。以前中学生のときに来たときは、庭中にじょうろで水をこぼして歩き、トランポリンをとんだ。これは彼が幼児のときにくり返した遊びである。

### 砂や石を投げる

Gくんは三歳のときに私共の保育室に来了。指を上方にかざして眺めて長い時間を過ごした。その頃手かざし行動ということが自

閉症の特徴的行動のひとつに数えられていた。しかし私は自閉症という診断名を通して子どもを見たくない、この子どもとして接したいと思っていた。

ある日、私はGさんとゆっくりとつき合うことになった。Gくんは地面に数字を書いていた。私も傍にしゃがんで一緒に字を書いていると、彼はときどき私を横目で見た。

急にGくんは砂を指さきでひとつまみとって私の頭の上のせ、「ほうし」と言った。私が頭を振って砂を落としながら顔を見ると、Gくんはケラケラと笑った。次の瞬間にはまた下を向いて、37、38、39……と、声を出して地面に数字を書いた。そしてまた私の頭や背中に砂をかける。私が後ろを振り向き、ヤッターと大げさに言うとかケラケラと笑った。午前中一杯こんなことをくり返した。私は意外に早くつながりがついたことを

喜んだ。

私はその頃はまだ大学勤めで、週に一日、障害の子どもの保育に出ていた。

間もなくGくんが四歳児の新学期になったときである。Gくんは砂場の水たまりの中に砂や小石を投げ入れては水を何度も汲みにくいことをくり返した。ひとしきりそれをやると次には砂や小石を金網ごしに外に向かって投げはじめた。それは金網の間から建物に向かって落ちた。石を投げるのは困ると思うのと同時に、保育をしている私にはこの行動はこの子にとっては意味があるように思えて、それをとめたくなかった。

丁度その頃、私は行動を客観的に見るだけではなく、子どもの内的世界の表現として見ることを考えはじめていた。Gくんが砂や小石を水たまりに、また金網から外に投げるときには真剣な表情だった。よく見ていると、



投げ、という語は適當でなく、外方に向かつて手から放す、と言った方がより正確ではないかと思つた。子どもは手に持った物を手放すのには自分で練習する期間を必要とするようである。保持することと手放すことと互いに相反する行動を調節すること、つを会得しないと、いずれかの極端になってしまう。

手に握つた砂を水の中に手放しているうちに泥んこができる。Gくんはその中に手を入れ、ぐにやぐにやの泥をにぎったり放したりしてかきまわした。私も同じように手をいれてみると、何かもやもやしたものの出口を見つげ出そうとする感覚が伝わってくる。こんな感覚を共感していると同じことのくり返しの砂遊びも退屈しない。他の子どもたちが砂場から立ち去つてもGくんは砂場にとどまりつづけた。母親はこの子がこんなに砂場で遊んだのははじめてだと言つた。

#### 禁止された領域

一週間後、五月の雨あがりの庭の水たまりの中に、Gくんははだして入りとても楽しそうだった。そのあと砂場の砂を水たまりの中に放り、また金網の外に向かって投げることがくり返した。帰りの時間になつても帰ろうとしない。母親は、Gくんが二歳くらいの子水いたずらは禁止していと話してくれた。Gくんにとっての水は禁止された領域であつた。水はその境界をこえてはみ出してゆく。この日は彼はその水の中に自分の身体全体を入れた。そして「もっと水」と言つて要求した。母親はこの頃この子は水に憑かれていた。母親は、水に執着しすぎるのではないか、数字にも固執しすぎるのではないかと心配した。

## 身体感覚による想像

二期期になるとほとんど一日中トランポリンをする日もあった。Gくんの手をとって、1、2の3と3で高くとび上がり、おりてころがったところを背中をくすぐるとケラケラと笑う。上方に向かって跳躍する開放感を感じるのもであろう。手をとって高くとんでいるとき目を閉じている。自分自身を身体運動感覚で純粹にたしかめているように思えた。

Gくんは砂場で砂山を何度も作ってはこわして遊んだ。たまたま訪問されたオランダのユトレヒト大学のエディット・フェルメール先生が、子どもが砂山をこわしたとき傍にいた保育者はそのままだしていたが、そのとき保育者はどう思っていたか、砂遊びをもう一步先へ発展させようと思っていたかどうかとたずねられた。一緒に砂遊びをしていたOさんは「そのことをもっと面白く楽しむのにな

うするかを考えていたが、もう一步遊びを発展させようという風には考えない」と答えた。フェルメール先生はうなずいて、触運動感覚がイマジネーションの根源なのであって、世界はここからエントファールン（たみこんだ包みがひろげられること、すなわち発達）するのであることを語られた。

私は手放すことについても、その身体運動感覚が精神の発達に重要な位置を占めていることを確認することができた。

### 排泄——保持したものを手放すこと

夏が近づいたころ、Gくんは私共のところに来たがらない日がつづいた。数週間たったとき父親と母親がそろって話しに来た。来たがらないこと自体は心配していないが、便秘がひどいので、そのことで相談にきたと言った。もう十日以上も大便が出ない。日によっ



ては一日中部屋の隅にうずくまって力んで  
いることもある。そうなると母親も一日中子ど  
もを見つめている。どうしたらいいだろうと  
の相談である。私はGくんの一学期の様子を  
話し、砂遊びをしているときに、「でたの、  
うんうんした」と言うのに気付いたことなど  
話した。実際に大便が出ていたのではなく  
て、砂を水たまりにいれて遊んでいたときの  
会話である。それまで私は手放すことと排泄  
とを結びつけて考えていなかった。

その日私は付属病院の小児科医を紹介し  
た。一週間くらい便秘しても心配はいらない  
こと、流腸などするよりもとよくきく漢方薬  
を教えてもらったと両親は報告にきた。私は  
両親の落ち着いた対応に印象づけられた。

秋になって、Gくんはじょうろの水を  
ちよっぴりずつ庭のあちこちにこぼすことを  
やりはじめた。つまり少しずつ水を手放して

みるのである。水をこぼしながら「火曜日は  
うんこ」と何度も言っていることもあった。

ある日Gくんがいつものように庭に水をこぼ  
して歩いているとき、私は「おしっこジャ  
ー、うんこポタポタ」と言ってみた。それは  
Gくんに大変気に入って、「ぼくおしっこジ  
ャー、チャ(弟のこと)おしっこジャー、マ  
マ、パパ、じゅんちゃん、○○ちゃんおしっ  
こジャー」と言って水をこぼして歩いた。地  
面に数字をかきながらも「おしっこジャー、  
うんこポタポタ」と言っていることもある。

そのうちに「水くんできて」と言う。もつと  
水というので私は何度も水を汲みにいったが  
あんまり水びたしになるので、つい少しずつ  
にしてしまう。そんなとき、私自身もどうし  
てもっと大胆に水を手放さなかったのかと後  
になって反省してしまふ。そんなとき、Gく  
んはシャベルを振り回して私の頭から砂をか

けた。

三学期になって最初の日、Gくんはプラスチックの積木を両手にもって蛇腹のトンネルの中に入り、それを外に向かって投げけることをくり返した。自分もその中にもぐりこみ、身をくねらせて出てきたときには大声で笑った。私はこのことを直腸の中から自分自身が大便になって出てきたかのように思った。

この日のことについて、私は『保育の体験と思索』（大日本図書、昭55、P・184―187）に詳しく記した。何人かの方々から、これは考えすぎではないかとの批判を受けた。そこではここに述べた経過を記さなかったことにもよるのではないかと思う。

これで便秘が劇的に治ったわけではない。この後もときどき、便秘が一週間くらいつづいて落ち着かないと母親から話をきいたこともある。また手放す遊びもつづいた。母親は

「家でもいっぱいちらかして、でも私はいいと思っさせておくんです。いままでだと便秘していると気になって、じっとみつめていたんですけど、この頃は先生たちに話せばもう安心して、買物なんかに行くんです」と言う。保持することと手放すことが子どもの世界のテーマになっているときも、生活全体の変化の中でそれが意味をもつことが分かる。

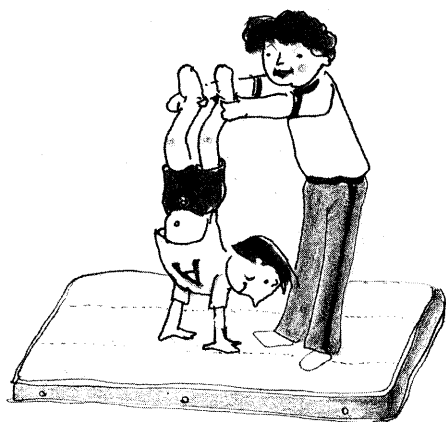
\*

Gくんは就学を一年遅らせ、普通の幼稚園にいつから普通学級に進んだ。いま高校二年生である。成長した後には、幼児期に本人も周囲も格闘した精神的課題は多面的な生活の中にかくされて、外部からは観察されない。しかしそれは身体運動感覚として意識と無意識の中間層に記憶されているのだろうと

考える。発達危機の際して、それが異なつた次元で再びあらわれるとき、幼児期に会得した体験は、自分自身でそれを解決するのに

役立つだろうと思う。

(愛育養護学校)



特集へ腐る▽

「腐る」ということの

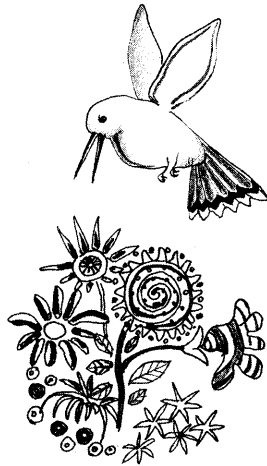
プラス面

肉や魚などの食品の「腐敗」と酒、味噌、醬油、食酢などの「醸造」、あるいは抗生物質やアミノ酸、核酸関連物生産などの「発酵」は、人間の側からすると大変な違いがある。しかし、カビ、細菌、酵母などの微生物の側からみると同じように微生物の増殖に伴う生化学的反応であることに変わりはない。人間に役立つも

のか、人間に害を与えるものであるかの違いである。

東アジアのモンスーン地帯は、湿度、温度など微生物の繁殖に好都合である。従って自然発生的に、微生物を利用した発酵食品が欧米諸国に比較して、ずっと豊富である。文化人類学者の中尾佐助氏（大阪府大名誉教授）は、東ア

相田 浩









う意味もあるが、食物の方でみても人間に害を与えることばかりでなく、逆に役立つ例もある。世の中のことも、悪い面には注意しなく

てはいけないが、良い面にも注目して積極的に活用して行く方がプラスであろう。  
(大妻女子大学)

# くされ縁

平田 道子

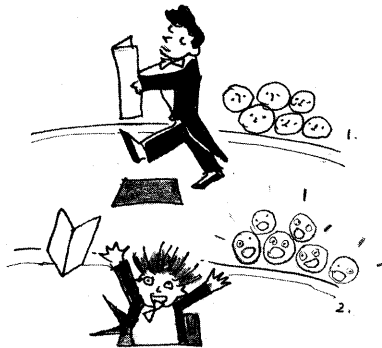
くされ縁について書いてみたいと思う。

《くされ縁》という、まず夫婦の仲が思い

浮かぶ。言葉の定義通り「離れようとしても離れられない、好ましくない関係」を言うのかと

いうと、実際は、好ましくない関係の中に、育っているものが含まれている。

先日、コーヒーの好きな85歳の老人と喫茶店で話し合うことがあった。















多い土壌に繁殖し、これらが多いほど腐植は活発に、より早く行われます。

森や林に堆積した落葉が、下層から徐々に腐って腐葉土となり、やがて土に還っていくように、草花や野菜を育てる場合も、雑草を適度に生やし、これを刈りとって花だんや畝に敷くと、森や林、あるいは野原と同じような生きた土壌環境ができていきます。

自然農法で無肥料栽培が可能なのは、こうした養分が無理なく自然に蓄積されることによるものです。また、自然農法地で、病虫害が多発しないのは、土壌環境に無理がないためです。米糠や油カス、鶏フン、生ゴミなどの有機肥料をそのまま土に入れると発酵の際に生じる化学物質や熱が植物に影響を及ぼし、病虫害を発生させることとなります。

堆肥は、有機質肥料を生のまま施さないように考え出されたもので、いったん別の場所で堆

積し、植物や、土壌環境に悪影響を与えないように発酵をすませたものです。

肥料としての効果のほか、通気、保温、排水、保水性にすぐれ、植物の生長に適した条件をそなえています。いわば堆肥は、人為的に自然の循環を再生させたもので、完全発酵させたものは病虫害も多発しません。

作物や、草花を無農薬で栽培するための要としてもよく、菜園や庭を肥沃にし、生きものが溢れる生態系をよみがえらせてくれます。

堆肥の材料は、雑草や落葉を主体に、鶏フン、油カス、米糠などで、薬品や農薬が使用されていないものならなんでも利用できます。

堆積場は周囲、あるいは二〜三方を板などで囲み、材料をサンドイッチ状に積み上げます。

この際大切なのは、各層の材料を積むことに土をはさみ込み、枯れ草や青草、落葉の層を中心に水を打ちながら積みます。









M子「手がかゆくなつてくさつてしまふよ」

保育室で着がえをしながらそんな会話をしていた二人は、バケツとはさみ棒を持って銀杏の木の下に飛んで行った。

やがてバケツ一杯のぎんなんを拾った二人は「くさい、くさい」「これくさってるんじゃないの」「くさつて食べるの無理だよ」

その話を聞いていたR夫「先生、茶わんむしのぎんなんもこんなくさってるの」、K男「ぼく食べないよ、おなかいたくなるもの」。他の子ども達も加わってテラスではこのくさいぎんなんの扱いについて議論が始まった。

U男「くさいし、ぐちゃぐちゃなので食べるのはやめようよ」

M子「もつとくさらせると食べられるって、おばあちゃん言ってたよ」

R男「どうやってくさらせるの」

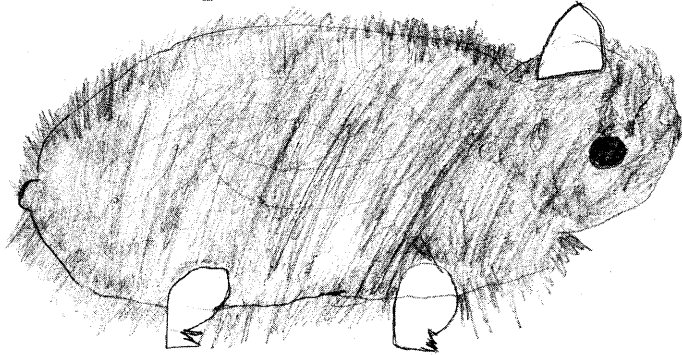
M子「泥の中にずーと埋めておくんだって

◀ぎんなんを拾う子ども達





もるもると



M子「ぎんなんと違うの、今度は掘らないの」  
U男「じゃ、モルちゃんどうなるんだよ」  
R男「くさったら天国へ行くんだよ」

幼稚園で「くさる」場面に出合うことは少ない。時として宝物のようにしてロッカーにしまいいこんだ、花や、木の葉、実が忘れられ「くさる」ことはあるが、そのような経験をする子どもは最近では少ない。

むしろ自分の思いが周りの大人（親や教師）に伝わらず気持ちが「くさる」経験をする子どもが多いように思われる。

目に見えぬ「くさり」が子どものサインである場合もたくさんある。それが見える教師でありたいし、そんなサインを子どもが出せる、子どもとの関係でありたいと思っている。

（平塚市立城島幼稚園）

## 附属幼稚園の教育(3)

村石 京



人とのかわりについて

新教育要領では領域として、次の五つの柱をあげています。

○心身の健康に関する領域「健康」

○人とのかわりに関する領域「人間関係」

○身近な環境とのかわりに関する領域「環境」

○言葉の獲得に関する領域「言葉」

○感性と表現に関する領域「表現」

そしてこの五つの領域の中で、特に大きくとりあげられているのが「環境」と「人間関係」の二つの柱であるところに注目したいと思います。

「環境」とは新教育要領で新たな視点としてとりあげられたものであり、これに関しては後章でまた触れるようにしたいと考えていますが、「人間関係」は以前の幼稚園教育要領の六領域（健康・社会・言語・音楽リズム・絵画製作・自然）と対

比してみると、「社会」の項との関連が深いと見てよいのでしょうか。

人とのかかわりに関する領域「人間関係」のねらいは

(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう

(2) 進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感をもち

(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

となっています。このことに関して附属幼稚園ではどのような教育を行っているかについて述べて見たいと思います。

「人とのかかわり」に関する領域、これは私どもの附属幼稚園の教育の中で、最も重きをおいている面といえるのではないのでしょうか。幼稚園の日常の保育の中にある人間関係は、「教師と子ども」「子ども同士」「子どもと子どもとそして教

師」この三種が考えられます。それらは一対一の関係の場合もあるし、複数であったり、少し大きな集団である場合もあります。そして三種は夫々別々であるわけではなく、一緒になったり、入り組んだり、あるいは個と個の関係であったりしています。そのいずれもが大切であることは言うまでもありませんが、まず第一に子どもが安定した気持ちをもち、園生活が楽しくなってくるには、教師と子どもとの関係から出発すると言えるでしょう。教師の大きな愛情に見守られ、支えられて安心して園での生活が送れるという体験を通して、子どもも自分の方からも人とのかかわりを求めるようになっていくのだと考えています。

日常の保育の中で、子どもとの関係をつくる第一歩として保育者がしなければならないことは、子どもの言ってくることを真剣に聞き、きちんと受けとめていくことにあります。そして子どもがしていること、あるいはしようと考えていること

を認めていくことです。保育の中で、自分が教師であるから子どもより上に立って教えるとか、要求したりするのではなく、子どもが主であり、子どもが前面に出て保育者は後からそれを支えていくという気持ちで常につようになしたいものです。こうして子どもを認めていくということによって、保育者自身が子どもに対して充分心を開き、子どもを受け入れていくという保育の基本原理をもつならば、子どもも自分を認めてくれる人に対して安心して心を開き、お互い士の関係は望ましいものとなっていくでしょう。保育者と子どもとの間に大きな人間関係のきずなが育つためには、先ず保育者の側から子どもを全面的に受け入れていくことが基礎になると思います。大切な人格形成の基が築かれる幼児期にあって、人間関係における信頼感を持つというのは何にもまして重きをおかなくてはなりません。附属幼稚園では私

ども保育者は子どもの心を大切にして、温かく大

きく包み、子どもの言うことを真剣に聞き、子どもの心の中に人に対する愛情・信頼が育っていくようにしたいと考え、努力しています。

次に子ども同士の間を築いてみたいと思います。人間同士のかかわりは複雑で入り組んでいることもよくありますが、園生活の中で子ども同士の間も決して平坦ではなく、かかわりが深くなるとかえって、自分の思いが相手に通じなかったり、受け入れてもらえないための悲しい思いや摩擦が出じたりする場合も起きたりします。主張の強すぎる子ども同士では言いあいなどのトラブルも見えてきますし、逆に強い子どもと受け入れているばかりの子どもの関係は、一見おだやかにいっているようでも、それは決して好ましい人間関係とは言いきれません。保育者は、子ども同士のかかわりを深く見つめることをしなければならぬと思います。そのためには、子どもの動きや表情を外側からとらえるのではなく、保育者も子

どもの本当の仲間となって、子どもの思いや考えていることをわかっていくようにし、子ども同士の関係をうまく育てたり、子ども同士と教師の関係も順調に育っていくようにしたいと考えています。「先生はいつも自分のことをわかってくれる。」「友だちはいつも自分を支えてくれる。」「先生が入ると遊びがもっと楽しくなる。」こんな思いを一人ひとりの子どもが夫々の胸の中に持っているのなら、そこには人に対する信頼感が育っているといえるでしょう。

私どもの幼稚園では、教師が何かを教える指導するという時間を出来るだけ少なくして、自由な遊びの時間を多く持つようにしています。それは子どもにとって遊びが何よりも大切であり、遊びを通して子どもの中に育つものが何より多く、深くあると考えているからです。遊びながら子どもたちは考えたり、工夫したり、努力したりしてい

くとともに、遊びながら仲間づくりをし、友だち関係を深め、友だちとともに喜んだり、驚いたり、あるいは悲しんだりということを体験しています。これは人と共感するという心であり、やがて相手に対する優しさや思いやりとして育ってきます。人間関係というのは、一方的な受け入れや押しつけではなく、相手に対する思いやりや優しさがあるからこそ、素晴らしいといえるのではないのでしょうか。私どもの幼児教育の原点は、人間を育てる、心を育てることにあると考えています。そのため遊びを通しての日々の中で、よい「心」の育ちがあるようにと願い、教師も子どもとともに遊びの仲間入りをしたり、一緒に遊びを進めたり、見守ったりしています。そして子どもと共感出来る心を持つようにありたいと考えています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



J・A・コメンスキー

T・G・マサリクの講演から(1)

大槻 優子



昨年の正月のことになるが、新しい社会体制で就任したばかりのV・ハヴェル大統領は、年頭演説をこう結んだ。

「私にとつて、最も意義深い前任者であるマサリク大統領は、最初の演説をコメンスキーの言葉で始めましたが、私はその言葉で年頭の挨拶を終わらせていただきます。

——人々よ、政権は再び自分達の手に戻りまし

た。」

コメンスキーは、それを悲願の言葉として表し、それが実現するまでに準備すべき民族の課題を提起した。チェコが、一六二二年に白山の戦いで負け、続く三十年戦争の終結にチェコ民族の独立を賭けたにもかかわらず果たせなかった時のことである。コメンスキーの言葉は、民族の悲願となつて、約三百年後のチェコスロヴァキア共和国の誕生を待つこと

になる。

T・G・マサリクは、その初代の大統領として、自由・民主主義・人道主義・道徳性を基本的な柱に、近代国家の基礎を築いたが、その背景では、十九世紀半ばから力を強めてきた民族復興運動と、その運動の中で見直され、再評価された民族指導者としてのJ・A・コメンスキーが大きな役割を果たしている。

最近の週刊誌の中に、偶然、当時カレル大学教授であったマサリクが、一八九二年三月二十八日、コメンスキーの生誕記念日に学生達へ向けて講演した記事を見付けたので、ここに紹介したいと思う。十九世紀のチェコ語で書かれた文章は、私には難解なところも多いのだが、チェコ民族独立の気運のたかまった社会状況でのコメンスキーについての講演と、いうことで興味深いものがある。

「皆さん、私は皆さんと内輪の仲間としてお話し

することができ、公けの祝賀用の講演をする必要がなくて、うれしく思っています。多分、私にはそうできそうにありません。

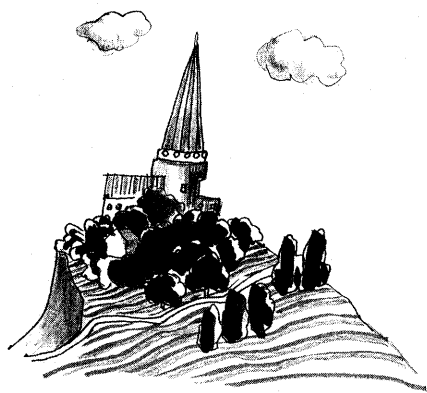
コメンスキーのような人物を、私達はただ讚美するだけに留めるべきではありません。言うなれば、このような偉大な人物の遺言を守ってきたかどうか、今でも守っているかどうか、各自の良心に問うべきです。

コメンスキーは、偉大な人物です。偉大な人物の運命は、往々にして奇妙なものです。しばしばその重々しい権威で、その偉大さをつくりあげてしまう場合がありますし、またその後継者達が、偉大な人物の成し遂げたことを発展させずに、すっかりそれに頼り切っているという場合もあります。こうした場合は、その人物は偉大なのではなく、普通の人間のものかもしれません。人間思考の分野の歴史では、アリストテレスの例があります。彼は何百年もの間、人間学の師でした。けれどもそれは、彼自身の偉大

さからなのではなく、誰も彼を越えられないという観点からのものでした。有難いことに、その意味ではコメンスキューも偉大な人物とはいえませんが。コメンスキューは、少し違ったやり方で人類に貢献しました。彼は、自分の世界観、思想、目標で、人間生活を明るくし、同時に暖かくしようとしました。それは、公けのことからを修正、改善していく大きな努力から生まれました。チェコでは、宗教改革を二つのタイプの人々が成し遂げました。(注・チェコの宗教改革の先駆者は、ヤン・フスで、十五世紀のことである。この後継者となる二つの派を指す。) ターボル派とチェコ同胞団です。一方は剣で、他方は言葉で、また一方は力で、他方は愛をもって改革を推し進めようとなりました。チェコ同胞団の純粋なタイプは、まさにコメンスキューです。

そのチェコ同胞団の道徳的な基盤の上に、世界観、思想体系を築く努力がなされています。(注・中世の)古い秩序が崩れ、新しい秩序の形成が半ば

といったような時代の、未来への展望が明らかでない状況での改革への願望です。それが、世界全体についての自分の考えを確立し、人間の生や死についての自分の見解を明らかにする努力に結びつきました。それを、どのような人も受け入れることができ



て、いつでも、どこでも生活の中にとり入れ、成り立たせられるようにしたいと考えたのです。

彼の草稿『人間の現実の改善に関する人類あての総勧告』で、自分の哲学的努力の構想を述べています。それは、人間世界の全領域にわたる改善についての計画です。そのためには、全領域にわたる基礎が用意されていなければなりません。『汎黎明 (panaugia)』の中に、『汎知 (Pansophia)』が与えられることです。その課題は、(注・混乱した現実、バラバラな知識) あらゆるものの連関をとらえて、つながりを明らかにし、秩序だてていくことです。その理論的基礎の上に、『汎教育 (Panpaedia)』が生じ、すべての人々の精神を向上させます。『汎言語 (panglottia)』は、言語を通してのよりよい理解に導きます。『汎改革 (Panorthosia)』は、この改善を最後までやり通せるための方法を提示します。『総勧告 (Pannuthesia)』は、一般的な注意で、これらが普遍的な改革につながってお

り、これによって、人類の課題が完了します。

『汎 (Pan)』という単語は、コメンスキの哲学を特徴づけています。すべてのために、すべてを含み、すべてを秩序づけるという意味です。哲学は、真実を追求する学問です。真実は、私達に精神的な安らぎを与えます。また、精神と物体が一つにとけあう調和を創り出します。宗教は、最高善に対する畏敬の念を育て、私達の良心に安らぎを与えます。政治は、人々の各々の活動がお互いにぶつかり合わないようにまとめます。その主な課題は、そのことによってあらゆる人々をお互いに結びつけることです。

全智は、調和のとれた全体であり、どこでもいつでも全体のままの状態にあります。生きること、つまりは考えること、この中心課題は、秩序です。『汎知』は、おそらくその意味で唯一の正しい方法です。この正しい方法は、このような原則で成りたっています。

一、あらゆる事物は、連関性の中で存在している。  
二、あらゆる事物は、同じ方法で処理される。

三、全事物は、お互いに段階的に作用し合うように秩序だてられている。

まさに、この段階を追って統一される全事物のまつまりが、汎知学の方法論の核をなしているのです。

この方法を用いると、事物は常に後のものは、前にあったものに影響され、未知のものは以前に存在してより多く知られているものによって準備されるといふ場合に秩序だっていることとなります。私達の精神は、この方法によってより深いものへと導かれます。そして、事物と事物の間にかけてすまじくないように続いていることが大切です。私達が知識を獲得していく際も同様に、段階を追って低い水準から高い水準へ向かい、留まったところから新しい段階への出発をします。要するに、これが汎知の方法です。この方法は、昔の教育者ソクラテスが産婆術と名づけた真理探究の方法を新しくしたもので

す。また、コメンスキーのこの段階・統合説は、コントの『三段階学説』に先立つものともいえます。

コメンスキーによれば、あらゆる事象、精神界は、低い水準から高い水準へと調和的に段階づけられ、どの事物もより小さな部分で構成されています。私達の精神も、自然なやり方での自己発達において、簡単なものから複雑なものへ、小さなものから大きなものへ、また部分から全体へ向かって始まるように形づくられています。知識を獲得することは、単に事物体系の知覚だけでなく、それ以上のことを意味しています。個々の人間の発達も、人類の歴史的な発展も、調和のとれた段階を追っています。コメンスキー自身が生きた証人でありましたが、目の当たりにしたチェコ民族の苦悩から、私達の民族がどのように導かれるべきかを示す努力をしました。

コメンスキーは、人類の発展を信じました。なぜ

なら、人類は限りなく学び続ける存在だからです。

この原則は、コムンスキーの教育についての考えだけでなく、他の学問体系、実生活についての考えにも適用されています。彼の説く宗教の教えについても簡単にふれておきましょう。それは、彼がその最後の牧師でもあり、哲学的指導者でもあったチェコ同胞教団にかかわっています。彼にとって、宗教はチェコ同胞団員のすべてにかかわることでした。それは、多分スラブ民族の宗教へのかかわり方を特徴づけることになっています。チェコ同胞団は、教義そのものよりも信仰と道徳性を重視しました。ミサも、教会組織もその人達にとっては副次的なことでした。(注・この後、同胞教団の他の指導者達、科学と神秘主義との結びつきについて続くが、省く。)

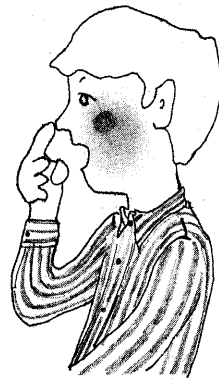
コムンスキーは、教会組織を国家と対応させて考えています。神を敬い、道徳を重んじる生活、真のキリスト教徒としての生活は、人間各自の課題にな

ります。その時、国家は副次的意義をもつだけです。しかし、コムンスキーは、『国家は、誰にとっても意義をもたないのだろうか』という疑問を投げかけます。学校は、未来の世代の人達を教育します。ですから、つまり学校は、社会を、国家を新しくします。あるいは、教会組織の改善は、同様に国家のそれと関連します。コムンスキーにとっては、君主国であれ、共和国であれ、どちらでもよかったです。したが、国家は、道徳性を失ってはならないと考えました。そこに、チェコ同胞教団を見るのが、コムンスキーは、戦争を全面否定するわけではありません。過去のチェコ同胞団も戦争(注・ターボル派が率いたフス戦争)で活躍しました。しかし、それでも、『キリストは、常に平和へ向けて助言する』と思い出して、戦争の野蛮さに目を向けています。』

—— つづく ——  
(プラハ在住)

電 話

松 井 と し



受話器をとると、鼻息だけが聞こえる。甥である。一歳前後の子供は、電話に興味を示す。ベルがなる不思議、ダイヤルをまわすおもしろさ。受話器の向こうから声がきこえる楽しさが、いっぱいつまっているのだろう。

二歳をすぎ、おしゃべりになった甥は、話の途中で「みえる？」を連発していた。手にしているお気に入りのおもちゃのこと、その場に展開している楽しさを共感してほしい気持ちが伝わってくる。傍で「テレビ電話じゃないのよ。」と笑う母親の声が聞こえる。

そして、五歳になった甥は、目下、友だちとの遊びを生活の中心にすえ、その興味を広げるのに忙しい毎日である。めったに電話はかかってこなくなった。

H男は自閉症と診断された子どもである。統合保育を実践している私共の園に入って教

日後、新入園児歓迎会の朝、母親から「休ませる」旨の電話があった。疲れ気味だし、集団が一堂に会する場では、H男が不安定になるだろうという心配であった。その時、H男が電話に出たがっているから話をしてやって欲しいと言われた。

「H君、疲れちゃったの？ 明日、待っているから幼稚園で遊びましょう。明日来てね。待っているわね。」

「あした、いくの、いくの。」

ところがしばらくするとH男が現れた。びっくりする私に母親が言うには、電話を切った後「せんせいのところへいく。」と支度を始めたのだという。私は再び驚いた。H男は電話のやりとりで相手の存在を実感し、その上、その人との関係で行動を起こした。出会ってからまだ数日の私との関係を、H男はしっかりとらえ、求めてくれたのである。その後も時々、H男から電話がかかった。「まっせいせんせい。」とつぶやくだけの電話だが、新しい環境に馴染もうとするH男にとって、電話は大きな意味をもっていた。ストレートに自分を表出する事のできないH男は、電話を通して信頼関係を確かめていたのであろうか。

(神奈川県立教育センター)



良き歌のために

モーレンカンフふゆこ

私はユーモアが好きである。人生の悲しみをエンエンと嘆くような短歌は、大嫌いである。たまにオランダくんだりまで送られてくる雑誌の、九九%に私はまず オエツを圧え、怒りを圧え、湧れくる哀れさにみじめになる。そしてそれらとちよんちよんの、否下手するとそれよりもっと下手くそな己の短歌を読み返して、救いようもなく落ち込んでゆくのである。



ペン取るを恐るる日には一魄かひの石をも蹴らず空も仰がず

俳句となると話は別である。とにかくあのボンボン冴えた生粋の「詩」は読んでいて楽しいし、作るとどんどん出来る（ここがどうも落とし穴らしい）俳句のあのユーモアに籠められた悲哀、客観性の中のかそけき自我、相乗作用を起す言葉と言葉、とりつかれる気持ちがよく分かる。「季語」という勉強もしなればならないから、知識も豊かになり、心も広くなる、はずである。

ために同じテーマで短歌と俳句を作ったとしよう。「手の中にどんぐりといふ故国あり」といえばスカーッとするのに、「遙かなる故国と呼びきどんぐりを拾えば故国手の中に在り」とすると、もたもたとしてくどく、いらいらしてしまふ。

しかしである。調子に乗ると、こういうことにもなる。つまり、「茄子買いにトルコの店の奥深く」などといってみても、オランダに出稼ぎに来たトルコ人達が、失業難にも福祉国家であるために帰国する必要がなく、妻をよびよせ、子をたくさん作り（時には扶養手当を目当てに）街の一角にゲッターのよな地区をつくり、店もでき、コーランの音楽がながれるゴタゴタした雑貨店

の奥の方に、日本の茄子のような小つぶの茄子が売っていて、（スーパーにはおぼけのような大きいのではないから）それを買いにいく度に、彼らは望郷をどう耐えているのだろうかと思う、なんてことは、この一句の背景として日本人には分かってもらえないだろう。つまり俳句は短かすぎるのである。短かすぎるということはもう救いようがなく、作者の人生やもち味がなかなか盛りこめない。せっかく外国に骨を埋める人生を選んだのだから、少しはその辺の事情を分かってもらいたいのである。「蛇を打つ父の執念我が執念」ではどうも平凡である。「蛇を打つ父の執念我が執念祖国の藪は暗かりしかな」と七七をつけて、やっと私の歌になる。

それならば自由に自由詩をといてもあるが、こっちの方は「生命力がありすぎて（つまりすぐ調子に乗って）、定型で圧えないと浮上」ということらしく、詮方ない。

だいたい私が短歌を始めたきっかけは、朝日新聞しか手に入らなかったことと、俳句はむずかしいが、短歌なら私も書けるといふ妙な自信で始めたのだから、本当は自由詩が書きたいのに短歌しか書けない、という石川啄木のような劣等感があった。それなのに私を知る人はことごとく、『短歌』を書きな

い」という。

短歌に対する嫌悪感、己に対する嫌悪感と関わりがあるのだろう。私が今何としても短歌を書き続けようと思うのは、いつの日にか良い一首を作ってみたいと思っているからである。その一首が己を救ってくれるかもしれない、秘かに信じているからである。俳句ではそうはいかない。

「我」の字を又も削らむ

唯一つ携えて来し「我」

良き歌のために

(歌人・アムステルダム補修校)

\*\*\* ある日の育児日記から \*\*\*

\*\*\* (6) \*\*\*

佐藤 和代\*\*\*



仕事か休みの日は、圭と近所の公園へ行くのが日課です。圭はこのところ、砂場がお気に入り。いつもさっと砂場に座りこみ、スコップで砂をすくってはこぼし、すくってはこぼし…。

まわりを見れば、同じ位の年齢の子たちが、ブランコからすべり台へ、ジャングルジムへと、ちよこちよこ走り回っています。何となく落ちつかない私。「ね、すべり台いこうか」と誘ってみました。圭はちらっとすべり台を見ただけで、また黙々と砂遊びを始めます。

うーん、これでいいのかしら。幼い子って、

もつと体を動かしたがるものじゃない？

ちよつと性格暗くない？…少し心配になってきた私は、実家の母に「圭ったらこうなの」と訴えました。

すると母はひとこと。「あなたの小さいときにそっくりよ!」。

ああ、そうでした。これは心配したって仕方ない、と私は覚悟を決めました。私も活動的な子ではなかったし、「子どもはもつと元気に」なんて押しつけられるのは迷惑だったはず。圭も今月で二歳です。そろそろ個性がはつきりしてきたのだ、確かに私の子だ、と喜ぶことにしましょう。



圭の保育園のおもちゃはユニーク。遊ばにいくと突っつてしまいます。

なかがわりえこ と おおむらゆりこ

『ぐりとぐら』

をめぐって

高原 典子

以前、ある高校で家庭科を教えていたとき、保育の授業の一環として、毎回一冊ずつ絵本の読みきかせをしたことがあります。子どもではなく、幼児教育学徒でもない女子高校生たちが、どんな絵本に魅かれるかということは、大変興味のあるところでしたが、反応はさまざま。いつも絵本を楽しみにして、授業の初めに「ねえ、先生、今日はどんな絵本？」とのぞぎに来たり、「今日は私が代わりに読んであげる。」と積極的な生徒もいれば、逆に「絵本なんてちっとも面白くない。」とノートに感想を書く生徒もいました。でも概して彼女たちを最後まで魅きつける力があつたのは、『つるにようぼう』『スーホの白い馬』『だいくとおにろく』『ねむりひめ』『ラプンツェル』『ブレーメンの音楽隊』など、昔話の絵本だったように思います。それは昔話そのものの魅力によるところが大きいともいえるでしょ

う。

ところがあるとき、幼児に人気のある絵本を紹介しようと、『ぐりとぐら』をとり挙げたところ、生徒たちの間から「知ってる!」「保育園でよく読んでもらった」「なつかしい!」などの歓声が上がリ、幼児たちが絵本をまるごと楽しむときの雰囲気そのまま、絵本と読み手と聞き手とが一体化した感じで読み終えました。授業を終えて廊下に出ると、いつも遠くにいた子から「先生、きょう、『ぐりとぐら』読んでくれてありがとう。」などといわれ、驚いたり嬉しくなったり。高校生が『ぐりとぐら』に魅了されたことは、私にとって大きな発見でした。

それほど、幼いころ好きだった絵本には、大きくなつてからも特別の力があるということなのでしようか。それは幼馴染みに久しぶりに再会した喜びにも似ていますが、人間同士の場合には、離れた時間の中でお互いに変化し成長していますから、純粋に当時に還ることはできず、思い出をなつかしむとい

う形になります。ところが、昔、親しんだ絵本は、時が移ろっても少しも変わっていませんから、私ども読み手は一も二もなくその世界に浸りきり、子ども頃そのままの感覚を追体験してしまうのです。

あるいは、その不思議な新鮮さは、自分の内なる「子ども性」を発見し、それをあるべき場所ですらに遊ばせてやったような喜びかもしれない。幼いときに大好きな絵本と出会えたということは、成長してからも、その「子ども性」を開放する広場を持つということにつながるような気がします。

今回はその『ぐりとぐら』の人気の秘密を探ってみようと思います。

#### ○ 演劇的な絵本空間

のねずみの「ぐり」と「ぐら」は舞台の下手から上手に向かうような形で表紙に登場し(図版1)、第一場面で森の奥へと向かいながら、歌を歌います。

◀ 図版1 『ぐりとぐら』（福音館）より



ほくらのなまえは ぐりとぐら

このよでいちばんすきなのは

おりょうりすること たべること

ぐり ぐら ぐり ぐら

これはなんと演劇的な登場のしかたであり、自己紹介でしょうか。そして、どのページを開いても画面の地の白色が目立ちます。画面には必要以外のものが描かれていませんので、余白が多い分だけ、白い画面の清らかな広がりを感じられ、それはしっかりと安定した舞台としての役割を果たしています。

森には木が密生しているイメージがありますが、大村百合子は大地を茶色などでいっさい彩色せず、白地にわずか九本の木を描いただけで「森」を出現させてしまいました。これは、舞台美術に近い手法ではないでしょうか。白い舞台に、必要最小限の大道具・小道具の木や木の実を設置し、主人公の「ぐり」と「ぐら」を有機的に動かしていくのです。ですから、読者は平面的な画面に描き込まれた絵を操



り、お話を読み進んでいくというよりも、白い画面を舞台とする演劇的空間の中で、主人公たち・役者がどんな劇をくり広げるかを見つめる観客に等しいといえましょう。そうした立体的三次元的な効果がこの絵本にはあります。そこで同じように描かれてはいても、「ぐり」も「ぐら」も明らかに背景の無機的な大道具・小道具とは性質を異にし、それらを使いこなし、主体的に演技する役者のように、読者の前に生き生きと顕れ現われてくるのです。

### ○選択する眼

次に、絵本の中で唯一の屋内の場面に注目してみましょう

二人は道で見つけた大きなたまごを調理すべく、家に帰っていろいろな道具を用意します。たぶん二人の家なのでしょうが、ここには家財道具などはいっさい描かれていません。読者としては家のようすをもっと詳しく知りたい気がしないこともありま

せんが、二人が大きなボウルやフライパンなどを一所懸命用意するようすにスポットライトが当たっているのので、かえって家らしくこまごまとした小道具のないことに、画家の意図を感じてしまいます。つまり、文章から「うちの中」であることはわかりま

すし、画家が主人公の「ぐり」と「ぐら」だけをクローズアップしているのので、読者はたいていその動きに注目し、その他周囲のものにはかすんでしまうのです。もし家の中のようすを細かく描写していたとしたら、それは客観的まなざしによるものですが、大村百合子は、カメラ的視点よりも心理的、演劇的視座を選んだのです。

同じようなことが、カステラができあがる場面にもいえます。文章の方では、「みんなはめをまるくして、かんしんしました。」とありますが、それを描き込むのは決して不可能ではないのに、絵の方では省略され、「ぐり」と「ぐら」とすばらしくおいしそうな「かすてら」だけがクローズアップされて

います。そこで若い読者は余分なものに目をそがれず、お話についていきやすいわけです。読者年齢が低くなるほど、過剰表現はお話のポイントをぼかしてしまいますから。画家は（作家も）何を描き、何を描かないかという選択がより強く要求されてくると思います。この絵本ではだいたいなものだけが選びとられ、確実に表現されています。

中川李枝子は『本・子ども・絵本』のなかで「……テレビのコマーシャルや幼児番組、人形劇など、その大半は実に騒々しく気忙しくできています。……まさに問答無用、問髪を入れず動きまくってしゃべりまくって、歌いまくって、子どもたちに考える間を与えません。せめて絵本の世界ではそういう愚かしいことのないように、作り手も与え手も心がけてほしいものです。」と書いていますが、絵本づくりへのこうした厳しい心がまさと幼い子どもたちへの本当に深い理解がなかったら、『ぐりとぐら』がロングセラーになることはなかったでしょう。

う。また高校生の脳裏にまで鮮明に刻みこまれていて、彼女たちを再び楽しませることもできなかったでしょう。

#### ○二人の主人公

この絵本の主人公はいうまでもなく二人です。複数の主人公の絵本は、他にもアーノルド・ローベルの『ふたりはともだち』『ふたりはいっしょ』やガース・ウィリアムズの『しろいうさぎとくろいうさぎ』などをはじめ、何冊も挙げられますが、多くの絵本では、主人公たちがそれぞれの個性を発揮するなかで、ストーリーが織りなされていきます。

ところでトミー・アンゲラーの『すてきな三にんぐみ』の場合も、三人の主人公の行動は『ぐりとぐら』のようにいつも一緒ですが、彼らには名前がなく、ぐりたちのように服装による区別（「ぐり」は青・「ぐら」は赤）もないため、主人公それぞれへの親しみは湧きません。でも、この三人組はどろぼ

うという特殊な仕事ですし、結末に読者の意表をつくようなどんでん返しがあつて、それがお話のクライマックスとなつていきますので、むしろ三人組という「複数性」がお話にも絵にも面白味を出すエッセンスになると考えられます。

では、『ぐりとぐら』はどうでしょうか。

彼らには、読み手が覚えやすく親しみやすい名前があります。そして最初の歌にあるように「ほくら」というだけあつて、仲が良く、相手のことばを受けとめながら、会話をはずませていきます。

たとえば、道のまん中で大きなたまごを見つけた場面では

ぐり…やあ、なんておおきなたまごだろう。おつき

さまぐらいのめだまやきができるぞ。

ぐら…ほくらのべつどより、もっとあつくてふわふわ

わのたまごやきができるぞ。

ぐり…それよりも、かすてらがいいや。あさからは

んまでたべても、まだのこるぐらいのおおき

いかすてらができるよ

ぐら…そいつがいいや

また、たまごをどう運んで料理するかを考える場面でも、二人はお互いを生かし合った相談活動を首尾よく展開していき、「おなべをもつてきて、ここにかすてらをつくらう」ということに決めるので、

二人の会話を聞いていると、まさにこのことばの「掛合い」がお話を進行させる役割を果していることがわかります。それだけでなく、「ぐり」と「ぐら」の会話こそ、幼い読み手の主体的参加を誘うのです。今まで述べてきたように、この絵本は絵とお話の構成が大変演劇的ですから、さらに主人公たちの会話が強く働きかけるとなれば、もう読者は観客などにおさまっていられず、知らず識らず白い舞台上に上って行って、主人公たちと一緒に、たまごで何を作ろうかと考えたり、どう調理しようかと案を練ったりしてしまうのです。それだけこの絵本には、「考える間」というものが用意されているわけ

ですが、何より明確にそれを引き出すのが『ぐり』と『ぐら』。幼い読み手に対して、この二人の主人公たちはいつでも心を開いて待っていてくれるのです。

中川李枝子は母として、又、十五年間現役の保育者として子どもたちにかかわり、創作意欲を燃やして『ぐりとぐら』『いやいやえん』『ももいろのきりん』などを生みました。保育園の子どもたちこそ、敵しい先生だったと感謝し、この小さいけれど立派な先生たちを誇らしく思っているといえます。これらの作品には、幼い人達の生命の力が脈打っています。日々の保育の中で、こんこんと湧く泉のように生き生きとした幼児の息吹きをくみあげ、それを創作の糧として生み出された傑作が『ぐりとぐら』なのです。

### 〇たまご

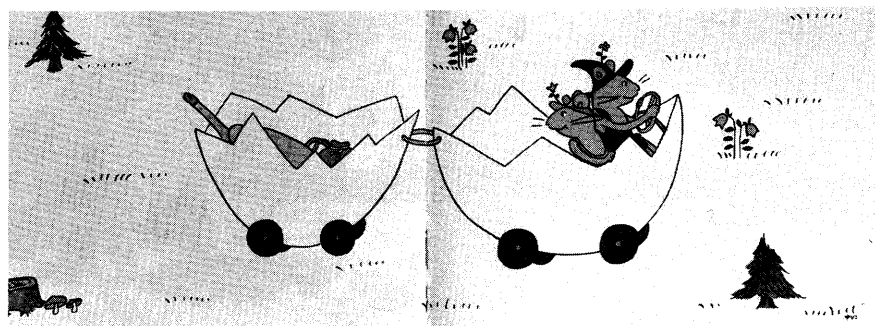
この絵本は中川李枝子が『母の友』に発表した

「たまご」という童話がもとになっているようですが、たまごからは何かが生まれます。たまごに最古の文化的意義を与えたエジプトでは紀元前二千年頃、主神ラーがガチョウのたまごから生まれたといわれました。古代朝鮮にも高句麗、新羅、加羅などの支配者がそれぞれ特異なたまごから生まれたという神話があり、とりわけ新羅の王祖が「うり」に似たたまごから生まれたとする説話は、果実からの誕生民話につながる部分があるとして注目されています。

文学作品の中の「たまご」もいろいろなものを生みました。ルーシイ・M・ボストンの『海のとまご』から半人半魚の「トリトン」が生まれました。「海」の象徴でもあるような躍動的な子「トリトン」は、成長の過渡期にある少年たちに、ひと夏のみずみずしい体験と友情とをもたらします。ヘルマン・ヘッセの『デミアン』で主人公エイミル・ジンクレエルが既成の世界観を打破しようと悩みながら

描いたのは、たまごのような地球から半身をのり出し、新しい神アプ拉克サスのもとへ飛び立とうとする鳥の絵でした。どれほど多くの青年が、この鳥によって自己への、あるいは真の世界への思索へと導かれたことでしょうか。こうしてたまごは、新しい「生命」を、「成長」を、そして「世界」を生むものとして象徴的に描かれています。

『ぐりとぐら』のたまごも、調理され、ふくらんで大きな大きなカステラを生みました。このたまごは大きすぎて台所まで運べず、野外の非日常的なままで料理されるせいか、どこか聖なる力を感じさせます。「ぐり」も「ぐら」も陽気で食べることが大好きで、そのためにはどんな労力も惜しみません。そして出来上がったものは快く皆にごちそうします。そんな二人が「聖なるたまご」を調理すべく、賜っても不思議はありません。食べものを分けるということは、心を分かち合うということですから、一緒に食べる仲間が多ければ多いほど「聖なるたま



▲図版2 『ぐりとぐら』より

「ご」は大きく、カステラはもっと大きく、「ぐりとぐら」の心はふつくと温かく感じられて、なんともいえぬ楽しい気持ちになります。

それにしても、満ち足りた思いを残しながら、二人がたまごの殻のオープンカーに乗ってサラリと帰っていく場面(図版2)は、子どもならずともほれぼれするようなすてきな幕切れです。オープンカーに「明日」を積んで、このうえなくいい表情の「ぐり」と「ぐら」。中川・大村姉妹が生んだこの二ひきののねずみは、これからも幼児の、そして「内なる子ども」たちの永遠のアイドルであり続けることでしょう。

#### 掲出図書

○なかがわえりこととおむらゆりこ

『ぐりとぐら』(福音館書店)

『いやいやえん』(福音館書店)

○中川李枝子さく／中川宗弥え

『ももいろのきりん』(福音館)

○アーノルド・ローベルさく／三木卓やく

『ふたりはともだち』(文化出版局)

『ふたりはいっしょ』(文化出版局)

○ガース・ウイリアムズぶん・え／まつおかきよう

こ訳

『しろいうさぎとくろいうさぎ』(福音館)

○トミー・アンゲラーさく・え／いまえよしとも訳

『すてきな三にんぐみ』(偕成社)

#### 引用文献

○中川李枝子著『本・子ども・絵本』(大和書房)

(小田原女子短期大学)

## たんぽぽの会

はるにれの会

渡部みさ子

金曜日、朝十時半、我家のそばの貫井公園に、幼い子  
を連れてお母さん達が三々五々集まってきました。「たん  
ぽぽの会」の始まりです。現在メンバーは母親十名、四  
歳児二名、三歳児六名、二歳児一名、一歳児四名、〇歳  
児三名、そして私。私だけは子無しで参加です。

「おはよう、Rちゃん。」

「おはよう、Kちゃん。今日のズボンかっこいいわね。」  
などと、朝のあいさつを交わしてから、子供達は胸にた  
んぽぽの名札を付けて、好きな所に行って遊びます。お  
母さん達は前回の感想文（レポート用紙に三々四行、長  
い人でも一枚ぐらい）を決められた袋にいれ、前々回の  
感想文のコピーを受け取ります。それから十二時頃ま  
で、みんなそれぞれ気の向くままに遊びます。お母さん  
達も子供達と遊んだり、他のお母さんとおしゃべりをし

たりして過ごします。Kちゃんはお砂場に行きました。

Rちゃんはただただ歩き回っています。あんよが上手になったRちゃんは、二本の足で立って歩くというそのことが嬉しくてしょうがないようです。Mちゃんはいつものとおり、まずブランコ。公園のすみっこにあるブランコでお母さんと二人だけの時間を過ごすことは、Mちゃんにとって一日の始まりの儀式のようなのです。あつ、元気のいいTくんがやってきました。来るなり

「おばちゃん、ブランコしよう。新幹線して！」

と、私の手を引っ張っていきます。先週した新幹線ごっこがとても楽しかったのでしょう。そのつづきです。Tくんに誘われて私もいよいよ活動開始です。私の胸の高さまでTくんを乗せたブランコを引き上げ、止め、

「新幹線 発車！」

の声と共に両手を放します。そのスピード感、ジェットコースターにも似たスリルが何とも言えないようです。

「もういっかい！」

何回でも声がかかります。Kくんもやってきました。A

ちゃんもやってきました。このようにして遊びはもりあがり、気持ちも高まり、大きい子たちは友達同士、小さい子たちは一人一人マイペースで大人の手を借りずに遊びだします。そうしてお昼、子供たちの遊びの様子を見て、

「お弁当にしましょうか。」

と、声をかけました。あれ、一歳のHくんが突然水道の方へ向かってよちよちと歩きだしました。私は思わず近くにいたお母さんと目を合わせて微笑してしまいました。もうお弁当の意味がわかるんですね。お弁当の前には手を洗わなくっちゃと、水道に向かったわけです。

シートを敷いて、みんなが手や足を洗って集まると、絵本劇場の始まりです。今日は『さんびきのやぎのらがらどん』の話にしました。それが終わると次はお弁当配りです。子供たちのお弁当を私の前に集め、

「♪Tくん Tくんは どこでしょうか♪」

「♪ここです ここです ここにいます♪」

「はい、Tくんどうぞ」



というようにして一人一人配っていきます。Tくんは少し顔を赤らめながら元氣よく手をあげました。Kくんは下を向いてしまいました。Aちゃんはニコニコ顔になりました。Mちゃんはママの後ろにかくれてしまいました。子供同士名前を覚えてくれたらいいな、と思いはじめたお弁当配りですが、子供たちはたいへん氣に入っているようです。家でもやると子供にせがまれるのだからうですから…。さて、みんなで「いただきます」をして、やっとお母さん達がいろいろ話し合える時がきました。今日の話題提供者はSさんです。

「今、子育てをしていて困っていることや悩んでいること、直接子育てには関係ないことでも、氣になること、考えていることなど、みんなの意見を聴きたいことがあったら話してください。」

と、Sさんに声をかけますと、

「そうですね…。この頃、三歳のYがすぐ『食べさせて』とか、『バジヤマ着せて』とか、言うんです。もう自分でできることなのに…。自立というものをどう

育てたらいいか悩んでいます。下の子（二歳）は下の子で自分ではまだ何にもできないのに何でも自分でやりたがって困っていますし…。」

と、話してくれました。すると他のお母さん方がいろいろな感想や意見を言ってくれます。

「うちの子も同じよ。甘えているんじゃないのかしら。」

「下の子のように色々世話をしてもらいたいのよ。」

「下の子がいなくても三歳児ってそういうところがあるみたい。うちの子は二人とも三歳の時、下に兄弟はいなかったけれど、お兄ちゃんになったり、赤ちゃんになったり、いそがしかったわよ。赤ちゃんをやっている時はもうハイハイしちゃって、あばばしか言えないの。もちろん、ご飯もひとりじゃ食べれなくなってしまふの。『そんな馬鹿なことをして、ほらちゃんと食べなさい。』なんて怒るとかえってだめで、こちらもその氣になつて『ああ、よしよし、ほうらおいしいわよ。まんまですよ。ああんしてごらん。』なんて何回

か食べさせてやると満足して、またお兄ちゃんに戻っていたわ。」

私も意見を言います。

「私も甘えているんだと思うなあ。Yくんは二歳そこそこでお兄ちゃんにならされてしまったわけでしょ。がまんさせられたことも多かったんじゃないかしら。やってって言うときはやってあげていいんだと思うの。でも人のこと言えないわ。私も息子によく言っているもの。『そんなことぐらい自分でできるでしょ』って。だけど、それって意地悪なのかもしれないわね……。自分でもうできることなのだから、幼稚園だったら一人でする訳でしょ。自立できていると言っているいいんじゃないかしら。下のNちゃんの『自分でやりたい』という気持ちを汲んであげて、手をだすのをぐっとこらえて見守ってやる。必要なだけ手を貸してあげて、成功感を味わわせる。これが自立を育てるということで、今が大事なんだと思うわ。」

するとSさんが

「ああ、もしかして、私さかさまなことをしていたのね。」

……

と、このように私達が話をしている間に子供たちは食事を終え、また遊び始めました。午前中はお母さんと一緒に遊べなかつた子も、不思議と子供同士で楽しんで遊びだします。一緒に絵本を聞いたり、お弁当を食べたりすると親近感が増すのでしょうか。それともお腹がいっぱいになると心もゴムまりのように弾んでくるのでしょうか。もうこの頃になると、公園も静かになり「たんぼの会」の子だけになっています。やがて母親たちも食事を終え後片付けをし、それからもう少しだけ——子供たちが納得するまで——遊んで、また三々五々帰っていききます。今日は一時四十分「たんぼの会」は終わりました。

\*

これが私の作った「たんぼの会」の一日です。四年前、息子の入園を期に作りました。下の子が幼稚園に

入ってしまったらもう公園に行くこともなくなってしまう。幼い子と遊び続けたい。私が大学で学んだことや子育て十五年の間に身につけた知恵や知識を、若いお母さん達に少しでも伝えたい。たくさんのお母さんや子供達との出会いのなかから、いろいろ学び取りたい。そんな思いからこの会を作りました。

いろいろな子がいます。元気いっぱいどこかと思えばまたあちら、公園のなかを走り回っている子。マイペースで黙々と遊んでいる子。すぐに空想の世界が広がりにいつも何かのつもりになって遊んでいる子。みんないい顔をしています。

でも時々何か気にかかる子に会う時があります。何がどうという訳ではないのですが、生き生きしていない、心のなかに何か無理矢理押し込んでいるものがあるような気がする、そんな子に会うと心が落ち着きません。声をかけてみたり、遊びに誘ってみたり、お母さんともいろいろ話し合います。よくあるのは、下に兄弟ができてまだ一年経たない時です。

「お母さんを取られちゃった。ぼくだって甘えたいのに。少しはぼくの面倒みてよ。赤ちゃんのことはちっとも叱らないで、ぼくばかり叱るんだ。」



そんな心の声が聞こえてくるようです。しかし、子供達は自分の口でこのように言うことはできません。子供自身何だか分からないのですから……。家での様子を聞いてみますと、言うことをきかなくなったとか、すぐ泣きわめくとか、おもしろが多くなったりとか、友達とすぐ喧嘩するとか、いろいろですが、まだこういう子供達は公園では元気だったりするのです。一番心配なのは「少し元気はないけれど、家ではとてもいい子です。」という子です。親は困ることがないので気づくのが遅くなります。でも私は気にかかってしかたありません。私の思い過ごしかしらとも思うのですが、違います。その子の気持ちを代弁してあげたり、心を癒してあげられるような言葉かけをしてやりますと、その時は何の反応がなくても、あとでちょこんと私の膝にのってきたり、私に話しかけてきてくれたりするのです。本当に子供って可愛いなと思います。私がお母さんに子供の気持ちをちゃんと伝えられ、お母さんがそのことを理解したとき、子供は元気になり、いい顔の子になります。

また、別な理由で心に不安があり生き生きとできない子もいます。お母さんに大きな心配事や悩み事のあるときです。子供のアトピーや言葉の遅れ、どもりが心配だったり、また、自分の子が乱暴で手が早く、すぐよその子をぶったり噛んだりしてしまうとき、それから幼稚園の入園間際もそうです。親が心配し不安になると、子ども落ち着けずイライラし、症状がひどくなったりします。それを見て親はますます心配になり、子は子でそんな親の傍にいて不安になり、いっそう荒れてきます。悪く回りだしてしまうとどんどん悪くなってしまいます。この連鎖を断ち切り良い回りに変えるのは大人の側の仕事です。でもこれはいへんな仕事です。こんなに心配はしなくてもいい、そんなに思い悩む必要はない、と、頭で解っただけではだめで、心からそう思わないと効果がありません。心からというのが難しいのです。ときに本がこれを救ってくれますが、一番励まされるのは、かつて同じようなことで悩んだお母さんの「大丈夫よ」の一言でしょう。また、同年代の子供を持ったお母

さんの「うちの子もそうよ」の一言です。それをお互いに聞くために「たんぼぼの会」はあるのだといってもよいくらいです。ただ困るのは、周りのお母さん達の一言が、却って不安をつのらせる結果になってしまう時です。

「アトピーの子って湿疹が治っても喘息がでてきちゃったりするんでしょ。」

とか、

「私の中学のときの友達に、どもりの子がいてね、大事なときになるとどもっちゃってかわいそうだったわ。」

等の言葉です。そんな時は私がフォローしなければなりません。私のもっている知識や経験、また今まで出会ったお母さん達や子供達から得た多くの実例などを伝え、「そんなに心配しなくても大丈夫よ」と話します。そうでない、会をやっていること自体が却ってマイナスになっってしまう。

ただここで大事なことは、私とそのお母さんとの間

に、ちゃんとした信頼関係ができていかどうかということなのです。そうした関係ができてないうちは、どんなに正しいことを言っても、「本当にそうかしら？」と疑われ、話は右耳から左耳へと通り抜けてしまいます。

ちょっと横道に逸れますが、上の娘が中二の時、あるクラスの先生が一生徒の親の抗議がもとで、担任を外されるという事件がありました。先生の体罰が問題にされたのです。担任が変わると聞いた時、クラスの女子生徒は泣いていたということですし、娘もどうしてこんなことになったのかしらと驚いていたぐらいですから、たぶんそんなに悪い先生ではなかったのだと思います。先生としてはその子を直したいとの思いからしたことでしょう。ただ、その子との信頼関係ができていないうちに行われた体罰であったのではないのでしょうか。そうした体罰はただの暴力でしかないのです。愛の鞭にはなり得ないのです。若いその先生にはその辺の認識が欠けていたのだらうと思います。信頼関係のないところからは何も建設的なことは生まれません。ただ誤解と反感、又は

無視しか生じないのです。「如何に早く信頼関係をつくるか」これがどんなに大事かというのを、私は「たんぼの会」で学びました。そしてまた、いつも会で心がけてきたことも、このことでした。子供と親しくなるには、まず、その子の心の声に耳を澄まし、よく聞くことです。そして正しくそれが読み取れて、ちゃんと応えられたとき、私とその子は仲良くなれました。お母さんと親しくなるのには、その人の子を可愛がることです。私がおその子を本当に可愛いと思っている、ということが伝われば、お母さんは心を開いてくれました。

随分と偉そうなことを言ってきましたが、もうひとつ分かったことがあります。それは、自分の子のことはよく見えているようでいて、実はそうではないということなのです。生活を共にしているものに見えるのは「今」の連続です。一週間前や、二か月前のわが子と、現在のわが子を比較するなど、なかなかできることはありません。「たんぼの会」では間を置いて子供達を見ていますから、子供達の変化や成長ぶりがとてもよく見えるの

ですが、わが子のこととなるとそうはいきません。ついでこのあいだも、息子の反抗を成長過程の一時の現象などと捉えられず、「みんなが甘やかすから悪くなったんだ」と考えて、やたら厳しい母親になって、ますます反抗されてしまいました。腹が立つやら、自信をなくすやら…。ひどいものです。わが子のこととなるとどうしてこんなに近視眼になってしまうのでしょうか。本当に偉そうなことは言えません。でも、この悪戦苦闘ぶりを話していくことが若いお母さん達の元氣のもとになっていくように思います。これが大事なのではないでしょうか。

今月は△腐る▽ということをやテーマに  
四人の先生方に書いていただきました。

相田先生は、食品微生物学、発酵が御  
専門です。「納豆ロード」「納豆トライア  
ングル」やワインのお話、とても興味深  
く思いました。

平田先生は、以前、心理相談もなさっ  
ていたということで、人間関係の中の  
「くされ」を書いていただきました。私  
のまわりにもくされ縁の関係はたくさん  
あります。でもなかなか切り捨てがた  
い、良い関係でもあります。

徳野先生は、風刺漫画を御本業とされ  
ていますが、雑草と野菜の共存という、  
型やぶりの畑づくりをなさっています。  
子ども達と一緒につくる幼稚園の畑も、  
これなら無農薬で、安心ですね。

島村先生の幼稚園は、園児がたったの  
九名で、しかも全員一年保育だそうで  
す。自然の恵みの中で、体験を通して、  
生活がしっかりと身についている……、  
まるで家庭のような幼稚園です、とおっ

しゃっていました。

\*

食べ物が腐る、木や石や金属などが  
くちる、人の心が純粹さを失う、思うよ  
うにならず気持ちが悪くさくさする、人の  
ことや行動をくさす……。

「腐る」ということばは、いろいろな時  
に使われますが、あまり良いイメージの  
使われ方ではありません。でも心や物は  
「腐る」と本当にダメになってしまふの  
でしょうか。又、腐らないことは、良い  
ことなのでしょうか。プラスチックやフ  
ロンガスなどは、くさったり、こわれた  
りしないことがかえって問題をひきおこ  
しているのです。

「腐る」ことによって、土にかえった  
り、浄化されたり、又新たな生命や物  
質、新しい価値が生まれてくるのです。  
そのためには、くさり切るということが  
絶対に必要なのでしょうか。そしてくさり  
切るまで「待つ」ということも、大切な  
ことなのでしょう。

(K)

## 幼児の教育

第九十巻 第六号

(一九九二年六月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成三年六月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三三二二九二一七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●方一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館  
特別企画

フレーベル先生の遺跡と教育施設をたずねる

# ヨーロッパ幼児教育視察

1991年7月24日(水)～8月3日(土) 11日間

ドイツ・チューリンゲン地方・フランクフルト・ベルリン・ブダペスト・パリ

昨年のツアーより



フレーベル幼稚園創設150年を祝う子どもたち

●ごあいさつ

フレーベル先生の遺跡を訪ね、幼児教育のルーツをたどりヨーロッパの幼児教育施設を視察する、「フレーベル・ツアー」も今年で第12回を迎えます。昨年ご参加の先生方から、たいへんご好評をいただきましたが、今回は特にドイツ統一後初めてのツアーになります。この機会にヨーロッパの自然と文化に触れ、ヨーロッパの幼児教育の現状をご覧になってはいかがでしょうか。



フレーベル先生生誕の家の前で(昨年のツアーより)

●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係  
東京都千代田区神田小川町3-1  
千101 電話 03(3292)7781(代)

主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地 チューリンゲン地方	
●エルフト	●オーベルバイスバッハ
●フランクフルト	●ハンガリー
●パリ	●ブダペスト



旅行期間 1991年7月24日(水)～8月3日(土) 11日間

旅行代金 818,000円 全食事付き (ローンによるお支払いも可能です。)

募集人員 25名 (定員になり次第締切らせていただきます。)

申込締切日 1991年5月31日(金)

企画：キンダーブックの **フレーベル館**

旅行： **日本交通公社** 運輸大臣登録 一般旅行業第64号

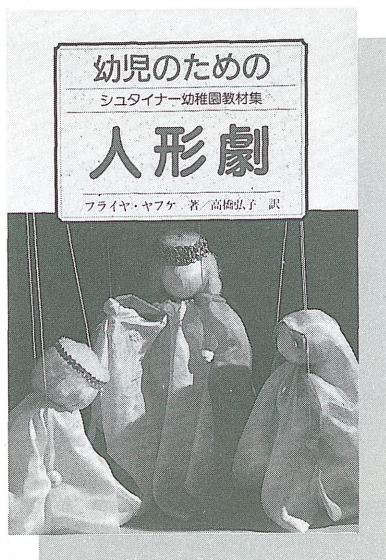
JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係  
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)

東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階  
千160 電話 03(3346)0181(月～金09:30～17:30)



シュタイナー幼稚園教材集

# 幼児のための人形劇



念入りに、しかし控えめに仕上げられた美しい人形による劇は、子どものファンタジーを育てます。



- ・自然の素材を使ったかわいらしい人形の作り方と、脚本を紹介します。
- ・演技方のこつと、子どもが演じる場合の注意も述べられています。
- ・人形劇が幼児の育ちに欠かせないわけを解説されているので、保育に生かせばよいか分かります。
- ・ドイツ・シュタイナー幼稚園の現場の保育者による原書と、日本の保育現場で活躍する訳者のコンビなので保育現場にわかりやすい本になっています。

フライヤ・ヤフケ 著 高橋弘子 訳

四六判 132頁 定価1,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**